＜タイトル＞

2025 年「脱炭素」のリアルチャンス

すべての業界を襲う大変化に乗り遅れるな！

＜目次＞

序章　　脱炭素という新しい風

第 1 章　風を感じる

・ブームとトレンドを見極めろ

・世界のお金の流れをつかめ！

・脱炭素と世界の富豪たち

・脱炭素と私たちの大切なお金

第 2 章　風の方向は？

・日本にとって向かい風？

・日本の屋台骨である自動車産業はどうなる？

第 3 章　風を理解する

・欧米中による 21 世紀の覇権争い

・そもそも温暖化は何が問題なのか？

・気候変動と脱炭素が生み出す対立

第 4 章　風に乗る

・向い風を追い風に変える思考法、行動法

・日本にとっての勝ち筋は？

・今こそ！産官学連携を！

第 5 章　風に乗り、羽ばたく

・脱炭素時代の企業経営

・社員を巻き込む秘訣

・ステークホルダーを巻き込む秘訣

＜書籍情報＞

出版社　：　PHP 研究所（2022/1/15）

発売日　：　2022/1/15

新書　：　237 ページ

価格：　979 円（税込み）

＜著者紹介＞

江田健二（えだ・けんじ）

専門分野　「環境・エネルギー」「デジタルテクノロジー」。富山県出身。慶應義塾大学経済学部卒業。東京大学 Executive Management Program（EMP）修了。

大学卒業後、アクセンチュア株式会社に入社。エネルギー／化学産業本部に所属し、電力会社・大手化学メーカ等のプロジェクトに参画。その後、RAUL 株式会社を設立。主に環境・エネルギー分野のビジネス推進や企業の社会貢献活動支援を実施。

一般社団法人エネルギー情報センター理事、一般社団法人 CSR コミュニケーション協会理事、環境省 地域再省蓄エネサービスイノベーション促進検討会理事（2019 年）等。

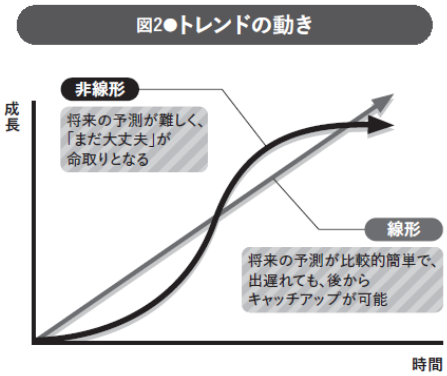
著書に第 39 回（2019 年）エネルギーフォーラム賞・普及啓発賞を受賞した『ブロックチェーン×エネルギービジネス』(エネルギーフォーラム)、『「脱炭素化」はとまらない！―未来を描くビジネスのヒント―』(共著・成山堂書店）等がある。

＜書籍ポイント＞

世界的潮流の「脱炭素」をビジネスにどう生かすのか！？ 環境・エネルギー×デジタル分野でコンサルティング会社を経営する著者からの、リアルな情報提供と具体的なアドバイスが満載。

●脱炭素について考え、議論する時に「気をつけるべきこと」がある。それは、自分が「どの視点に重きを置いて語っているか」を意識しつつ、相手の視点も意識するということである。視点として「住人の視点」「ビジネスの視点」「日本国の視点」「地球市民の視点」の４つが考えられる。（序章より）

●「脱炭素がブームかトレンドか」を見極めることが重要である。トレンドであった場合、「非線形に成長する」ため、将来の予測が難しく「まだ大丈夫」が命取りとなる。（第１章より）



●世界の資金が脱炭素に流れており、この流れはほぼ不可逆的である。世界の富豪も気候危機に取り組む企業に投資をしている。投資先である企業には「利益のみ」から「利益と環境貢献」の両方が求められ始めている。（第１章より）

●自動車産業でライバルが仕掛けてきた EV 化という「ゲームチェンジ」。しかし EV に関する２つの誤解が存在する。誤解１.すべてのガソリン車がＥＶになる、誤解２.EV 化で脱炭素が実現する。（第２章より）

●欧州、アメリカ、中国などの思惑が渦巻き、新たな覇権争いが繰り広げられている。欧州が提唱する新しい経済モデル「サーキュラーエコノミー（CE）」は、企業にとって収益率の向上が期待できる。その実現に DX は必須。（第３章より）

●脱炭素が生む対立。しかし、これまで温暖化ガスを大量に排出して成長した先進国は、途上国のさらなる発展と脱炭素社会の両立を、どうしたら実現できるかを考えなければいけない。（第３章より）

●「向かい風を追い風に変える思考法・行動法の５つのステップ」

１．意思をもつ　ビジネスチャンスとしてとらえる　先行きがわからないものに取り組む場合、「したたか、しなやかにビジネスチャンスに変えてやろう」という意思をもっていただきたいと思っています。「変化はやってくるものではない。変化はつくるもの。自分で起こしていくもの、楽しむもの」という考え方

が必要。

２．情報を集める　「新たな知」を吸収する
脱炭素については国内外の情報を集めることをお勧めする。不確実な領域だからこそ、自らが考えつかなかった「新たな知」を吸収していくことが大切になる。

３．妄想する　もし〇〇だったら……。
「もしバイデン大統領だったら」「もしイーロン・マスクだったら」「もし自社で１００億円の予算が使えたら」等、思考の枠を取り払って、妄想を膨らませよう。

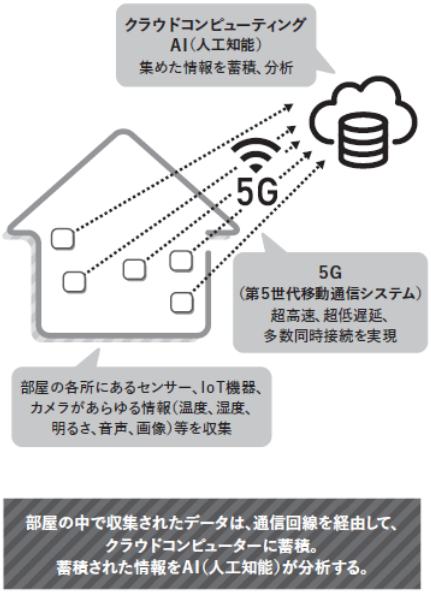
４．決断する　決断が後手後手になってしまう根本的な理由　情報がすべて揃うまで決断を待ちたいというのは、危険な態度だといえる。「どこかに正しい答えがあるはず」という前提を取り払い、適切に「場合分け」してみてはいかがだろうか。

５．行動する　「100 点を取らなければいけない」を疑え　「ゼロリスク」というのは、非常に難しい。まずは 90 点台を目指して進められるところを進めていく。（第４章より）

●日本は「オリジナルの勝ち筋」を考え続けるべき。脱炭素という大きな流れを使い倒す気概、狡猾さ、ルールに便乗する「したたかさ」と「しなやかさ」が必要。（第４章より）

●経営者としては、手柄を諦めて長期視点で取り組む。また、「脱炭素モデル」と「脱炭素戦略」の違いを理解し、両方をバランスよく進めていくことが大切。（第５章より）

●企業の脱炭素化には、デジタル技術が活用できる。AI・IoT・５G・クラウドなどを活用することでこれまでは実現できていなかったことが実現できる。（第５章より）



●顧客を単なる消費者としてではなく、良い社会を一緒に創っていくパートナーとしてとらえなおす。顧客との「情報の共有（Information sharing）」を進める。CO2 削減を、顧客との「共通言語」に。（第５章より）